

『義楚六帖』引用典籍考 三

——『金藏經』（衆經要集金藏論）について——

山路 芳 範

本書の編纂された当時の仏教の実態等を探ることを目的として、本書に引用されている典籍の検討を進めている。本稿では『金藏經』について検討することにする。

まず先学の研究によって『金藏經』に対する検討がなされていたことが判った。それは常盤大定氏の『後漢より宋齊に至る訳経総録』の中にみられる次の記述である。

「金藏經」の名称は経録中に見られず。夫れ或は「仁寿録」卷四、疑偽の中に録させらるゝ「金剛藏經」三十卷ならんかと思はる。之を「武周録」卷十五には三十一卷として、偽経と爲し、昇十八にも両録を承けて偽疑経と爲す。果して、然らば、「雜寶藏經」の如き、又「雜譬喻經」の如きものを抄集して、三十卷の大部を成せるものと見ゆ。(三二四頁)

常盤氏は本書の引用典籍を検討されているが、そのいくつかにについては再検討が必要であると考えられる。この『金藏經』に対する推測もその一つと言える。これについては後に

譲るとして、国文学の方面からも『金藏經』に対する検討がなされていたことが判明した。しかしながら、ここで言う『金藏經』と書名が異なっており、本書に引用される逸文まで追究の手が至らなかつたようである。

国文学の方面からは仏教説話文学、特に『今昔物語集』（以下『今昔』と略す）に關しての研究において『金藏經』が注目されることになるのだが、そのきつかけとなるのは、昭和九年の大屋徳城氏の「興福寺本日本国現報善惡靈異記解説」中における『金藏經』の検討であった。以後、昭和十年代の片寄正義氏、兩宮尚治氏の研究や昭和五十八年の今野達氏の研究によって、『金藏經』は『今昔』の編纂に影響を与えた資料の一つであるとされるようになった。

これらの研究の基になっている『金藏經』についてみてみよう。『金藏經』の完本の存在は現在まで確認されておらず、卷一、二、と卷六零本が確認されているだけである。

この巻一、二については、

(一) 大屋氏の解説中にあげられる「長承三年」と記している奥書を持つ藤原時代の写本。

(二) 京都大学付属図書館に所蔵されている「長承三年」と記している奥書のある近世新写本。

(三) 山田文昭氏旧蔵の「長承三年」と記している奥書を持つ大屋氏紹介本とは別本とみられる藤原時代の写本の三本が知られている。しかし京都大学付属図書館蔵本以外は確認することが出来なかった。

巻六は『興福寺日本霊異記』の紙背に記されている巻頭を欠く一本が知られるだけである。

前にここで言う『金藏経』と書名が異なったと述べたが、巻一に序文が付されていることからこの資料の編纂に関するいくつかの情報が得られ、これと他の資料との対照、本書所引逸文と本文との対照によって同一であると確定出来た。

この序文によって得られるこの資料の編纂に関するいくつかの情報をあげてみる。

北周の武帝が北斉を滅ぼし、僧尼、道士を現俗させ像塔伽藍を破壊した廃仏があった。これに際して、大徳記論師が名を変え、閑居隠棲したという。そして京師漢中の經典を選び、教門の豊で広く理解することの困難さを嘆き、その要言を選び要約して七巻に集成した。これは衆経の精であり、金

藏と号した。善惡の報を説き、有縁の人々の貧窮を除き、慧眼を啓き、発信を起こさせた。都合今、九卷、二十四章、百九十二条ある。

これによって、編纂の概要を掴むことが出来る。

この資料名についてみるとこれまで『衆経要集金藏論』をもってあらわされ、『衆経要集』、『金藏論』、『金藏要集論』とも記されている。この資料が『金藏経』と同一であるかであるが、『大部補注』に次の記述がみられる。

金藏経者。昔宇文邕残酷积氏時。有言論師。采集衆経要義。流布于世。号为金藏。(『新纂刊統藏経』第二十八卷二二頁b)

これは序文にみられる記述にあたる内容でありこの資料が『金藏経』とも呼ばれていたことが判明する。

また『続高僧伝』をみていくとその巻三十道紀伝(『大正藏』第五十卷七〇一頁a)に次のような記述がみられる。

広説経論。為彼士俗而行開化。故其撰集名为金藏論也。一帙七卷也。(中略)後遭周氏吞併玄教同廢。呼嗟俗壞每崇斯業。及開法始更広其門。故彼論初云邪見者是也。所以世伝。何隠論師造金藏論。終惟紀也。故改名云

これは序文に挙げられている記述に近いものであり、これによって序文で単に記論師と記されていた編纂者の今まで知られなかった伝が判明することになった。この道紀伝によれば、

吾講成実。積三十載。開悟匠導望有功夫。解本擬行斯遺誠也。今解而不行還如根本不解矣。徒失前功終無後利。

と、『成実論』の学僧として正道を悟り名声を得ることを望んだ後、悟って行じなかつたならば、根本を悟っていないよちなものだと改心したことが記されている。

この後、広く経論を読み、在俗信者への布教に転じ、『金藏経』七巻を編纂したとしている。更に、

論成之後。与同行七人出鄴郊東七里而頓。周匝七里。士女通集為講斯論。七日一遍

と、同行七人とこれを説教している姿があらわされている。全体として、学問によつて名声を求めめるのではなく、精力的に在俗信者への説教を行い、信仰を集める道紀像が描かれている。

これらは序文に記される編纂目的と少し違つてくる。廃仏に際して護法を目的として編纂されたものというよりは、大屋氏の「衆多經典より善惡応報の例話を抄録蒐集したるものにして、我が靈異記とその性質を同じうするものなり。」という在俗信者への教化を目的として編纂されたものとみるべきである。これは『金藏経』の内容自体を納得させる伝記と言える。

以上、この序文、『大部補注』、『統高僧伝』によつて『金藏経』とそれまで『衆経要集金藏論』等と称されてきた資料

『義楚六帖』引用典籍考 三(山路)

が同一であり、今まで見落とされていた編纂目的、編纂者名が判明したといえる。

次に現存の巻一、二、及び巻六零本についてであるが、まず巻一、二の現存本については前に述べたように京都大学付属図書館蔵本以外は確認することが出来なかつた。

これによると、巻一には邪見縁第一として三話、殺害縁第二として七話、計十話が掲載されている。巻二では、「邪見縁」等の分類項目はみられず、二十五話が掲載されている。

巻六についてであるが、前に述べたように現存の確認されているものは興福寺本だけである。残念ながら実物による検討を行うことが出来なかつた。そこで過去において調査された兩宮氏の論文、またこれによつて更に検討された今野氏の論文をもとに、現存本を四縁に分類してみると、巻頭を欠く第十九縁に三話、出家縁第二十として五話、第二十一縁に四話、孝養縁第二十二に四話、計十六話が確認できる。

以上、現存本に掲載される五十一話を知る事が出来る。

次に『義楚六帖』に引かれる『金藏経』をみてみると、以下の五十五の項目に対してその引用文をあげている。

- | | | | |
|--------|---------|---------|---------|
| 1 見似灰人 | 2 首財入塔 | 3 師資成仏 | 4 精進童子 |
| 5 王来問法 | 18 入塔滅罪 | 31 麵積如山 | 44 草蓋勝報 |
| 6 四不退法 | 19 齋得現報 | 32 金猫之銭 | 45 施蓋之福 |
| 7 五不可得 | 20 謗聖兄弟 | 33 便利遣人 | 56 蛤乘宮殿 |

- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| 8 體骨銜壳 | 21 更作輪王 | 34 補故勝新 | 47 蠱生自尸 |
| 9 月光生天 | 22 被誑墮坑 | 35 兇生金色 | 48 鸚鵡聞法 |
| 10 半偈捨身 | 23 比丘賊住 | 36 宝手金錢 | 49 孝養取穀 |
| 11 剝皮為紙 | 24 兄為与還 | 37 龍來共造 | 50 烏障出家 |
| 12 食糞之疾 | 25 被殺天生 | 38 不來如廁 | 51 聞法生善 |
| 13 億耳大施 | 26 金剛醜女 | 39 不得不敬 | 52 壞目之緣 |
| 14 持戒為王 | 27 滴水寄海 | 40 長幡在頂 | 53 牛變之災 |
| 15 三品十種 | 28 為一盃酒 | 41 無価宝床 | 54 共殺之報 |
| 16 持戒坐禪 | 29 執珠而生 | 42 針兒致死 | 55 羊被截足 |
| 17 一日生天 | 30 蜜無生死 | 43 金瓶之印 | |

これらの『金藏經』所載記事と現存の卷一、二、六に所載が確認されている五十一記事を対照すると、次の十四記事が対応することが判明した。

- | | |
|---------|--------------------|
| 義楚六帖 | 現存金藏經 |
| 12 食糞之疾 | I 10 駒那羅過去壞鹿眼得惡報緣 |
| 17 一日生天 | M 8 鞞羅羨那一日出家得生天緣 |
| 21 更作輪王 | M 2 善化王以蓋覆辟支佛廟得報緣 |
| 38 不來如廁 | I 1 迦葉為鞞肆王說邪見過惡譬喻緣 |
| 39 不得不敬 | M 12 打罵着袈裟人得罪報 |
| 42 針兒致死 | I 7 微妙過去妬殺小婦子得惡報緣 |
| 43 金瓶之印 | I 10 駒那羅過去壞鹿眼得惡報緣 |
| 44 草蓋勝報 | M 3 放羊人以草蓋覆仏得報緣 |
-
- | | |
|---------|---------------------|
| 45 施蓋之福 | M 2 善化王以蓋覆辟支仏廟得報緣 |
| 47 蠱生自尸 | M 6 福増年老出家得道緣 |
| 49 孝養取穀 | M 13 鸚鵡孝養父母得成仏 |
| 52 壞目之緣 | I 10 駒那羅過去壞鹿眼得惡報緣 |
| 54 共殺之報 | I 6 毘舍離三十二子過去殺牛得惡報緣 |
| 55 羊被截足 | I 5 迦留陀夷等過去殺羊得惡報緣 |

これによって新たに四十一の記事が『金藏經』所載記事である可能性が浮かび上がった。序文に記されている百九十二条を信じるならば、『義楚六帖』所載記事によって掲載されている約半数の記事を知ることになる。ただこの対応するものが、卷一、六掲載話であり、卷二に掲載される二十五話中からは見出せなかつたことは何等かの意味を持つものかも知れない。

以上、『義楚六帖』所引の『金藏經』が、現存の『衆經要集金藏論』等と称されるもの同一資料であり、常盤氏の推測が誤りであることが確定し、現存本に見られない記事が『義楚六帖』によって補えることを指摘した。

国文学の方面から指摘されている『法苑珠林』や、『今昔』との関係については別稿において述べることにしたい。

〈キーワード〉 義楚六帖、金藏經、衆經要集金藏論、今昔物語集

(家政学園高等学校講師)